

「劇の内奥に潜む、かすかな声に耳を澄ませよ」

酒井一途

——死者を思うことは、生者の義務である。それが、

いつまでも死者とともにある唯一の道である（ノヴァーリス「花粉」）——

古来、演劇は祭典として神に捧げられる儀礼の一つであった。そこではアリストテレスが『詩学』で論じたように、すぐれた人間や神々を悲劇によって「再現」することが価値とされることが多かった。

しかし、本稿では偉大なる「歴史」として書き残された神話や英雄譚ではない、演劇の持つ別の側面に光をあててみたい。浮かびあがったものの中から、今という時代において、演劇藝術でしか共有しえない感覚が見つかるだろう。そして私たち観客は、意識することによって、その感覚を認識しはじめることができるだろう。

仮説を提示する。劇場は死者の集う場である、と。死者とは、この世界にかつて生きていたすべての存在を意味する。「いかなる時にも、われわれは、死と時を同じくして生きているのだ」（「作品と死の空間」）というブランシヨの言葉を、もつとも明晰な形で体现しうるのが演劇の空間だ。

劇場というその建築物の、その客席の、その舞台の、その奈落の、その調光室の、その楽屋裏のまったく同空間には、あらゆる「時」が凝縮されている。そこでは幾千萬もの人々が入りし、劇を観、または演じ、感情を突き動かされてきた。今日の観客が涙するように、昨日の観客も、あるいは来年の観客も涙しているかもしれない。そう考えると、この空間には、時間の軸を超えた見えざる交流のあることがわかる。

舞台上には過去の面影たちが呼びさまされる。古典的な作品であれば、一つの役をこれまで演じてきた数多の俳優たちが、その「役」において一体となっている。たとえばハムレットという役。この役の演じられ方は、演じた俳優の数だけ存在する。そしてハムレットという「人間」のあり方は、観た観客の数、想像される。つまり演劇内に登場する人物は、イデア的存在として認識される。それが、劇場という同空間で共有されるところに演劇の特異さがある。

沈黙、客席のざわめきが静まる幕開き、役者の台詞のあいだの間、終演前に訪れる一瞬の静寂、その沈黙のなか、かすかな声が劇場に響く。上演を陰で見守っている、死者たちの声だ。かつて役を演じた者たち、役を心に生かした観客たち、この作品に涙し、あるいは笑い、此岸から旅立っていった多くのものたちが、時間の軸を超え、ふたたび劇場に集っている。この特異な同空間で。死者たちは踊りはじめる。声は沈黙のさなかに響き渡っている。耳を澄ませよ、劇の内奥に死者の声はある。

すべての過去は現在によって救済されねばならない。神話や英雄譚として残された「歴史」だけでなく、亡びていった多くの無名のものたちの声を拾いあげなければならぬ。その人なりに懸命に生き、それでも報われず死んでいったものたちの声を。それこそ、冒頭に掲げたノヴァーリスが言うように、「生者の義務」なのである。

舞踏家大野一雄曰く、「引き継がれた死者の思いだ。死者の思いが同時にあなたの思いとなつて、命が引き継がれ、思いが引き継がれていく」(『大野一雄稽古の言葉』) 演者だけではない。観客もまた同じ役割を担う。命を引き継ぎ、思いを引き継ぐ。人は「思う」ことによつて、その心に死者を宿すことができるのである。

文学が「読まれる」ことでしか完成しないように、演劇も「観られる」ことでしか完成しない。観客が視点をずらし、新たな枠の中で作品を観るとき、そこに演劇藝術は更新された姿で出現しうる。私たちが劇場空間に「死者」を感覚するとき、演劇は神ではなく、「人」に捧げられる儀礼として再生するだろう。今は亡き人々に向けられた祈りとして。

酒井一途(さかい いつと)

一九九二年、東京都生まれ。慶應義塾大学文学部在学中。「ミームの心臓」主宰。